近世期の日本における御蔵所の空間構成に関する研究（その3）： 長庇による空間形成について

STUDY ON SPATIAL STRUCTURES OF OKURA-SYO IN JAPAN DURING THE EDO PERIOD (PART 3) : ABOUT THE SPATIAL FORMATION BY “NAGA-HISASHI” (LONG EAVES THAT COVER AROUND THE ENTRANCE)

相模 誓雄^{*1}

Chikao SAGAMI

This study aims to clarify the effect of the spatial formation of naga-hisashi, the long eaves that cover Okura's entrances in Japanese Okura-syo (the premises of storehouse which stored the rice) of the Edo period. And the regional characteristics in Japan are shown. Naga-hisashi connected multiple doorways in front of the Okura, and were prominent in the Okura-syo of western Japanese domains and the Shogunate. Not limited to the original function of eaves, these naga-hisashi were also used as inspection stations (enclosure type) or formed corridors (open type), thereby making the Okura-syo more functional.

Keywords : Storehouse, Premises, Spatial structure, Eaves

蔵, 屋敷, 空間構成, 庇

1. はじめに

近世期、日本の幕府や諸藩は、年貢米徴収及び廻米のため領内の所々に御蔵所を設けた。明治維新後、御蔵所は租税の金納化によって不要になり、現存する御蔵は殆どない。しかし、見取図等の史料や貴重な建築遺構がある地域では、領域内における御蔵所の空間構成の検討が可能であり、筆者はこれらを用いて御蔵所の建物配置を類型化してきた³⁾⁻¹³⁾。本研究は、これまで領域毎に明らかにしてきた御蔵所の建物配置の型式を横断的に検討し、近世期の日本における御蔵所の空間構成原理及び地方性を明らかにしようとする一連のものである。1編目²⁾では、計屋及び建物配置の型式の違いが、御蔵所の空間構成を多様化させ、各地の御蔵所を特徴付けたことを明らかにした。検査所の計屋は、年貢米を徴収する御蔵所に特徴的な設備の一つであり、東日本の諸藩の御蔵所では標準的であった。2編目¹⁾では、建物配置の型式に焦点を当てた。建物配置の型式は、平行型^{注1)}と囲い込み型^{注2)}（Fig. 1）が大半を占め、これらの型式は日本における御蔵所の基本型と考えられた^{注3)}。さらに、西日本に顕著な基本型でない御蔵所のうち囲い込み型に類似するものを囲い込み系、平行型に類似するものを平行系に位置付けた^{注4)}。藩政後期の御蔵所は、大凡囲い込み系と平行系に大別でき、全ての藩に基本型の御蔵所が見られること、独自の空間形成手法を用いた領域では門の数などの制限があった場合に基本型をとったことを明らかにした。一方、本稿は、御蔵所におけるもう一つの特徴的な設備である長庇に注目し、建物配置の型式や長庇の連なりの観点から日本各地

Fig.1 The basic types of building arrangement of Okura-syo in Japan

Fig.2 A schematic diagram of Tomae (space under the lean-to roof that is in front of Okura)

の御蔵所における長庇による空間形成の効果を明らかにし、地域性について考察しようとするものである。過去に筆者は、加賀藩御蔵所における御蔵の戸前空間に焦点を当て、長庇による空間形成について検討した¹⁴⁾。御蔵の戸前空間は、基本的に下屋構造の庇となる

^{*1} 仙台高等専門学校総合工学科 教授・博士（工学）

Prof., Dept. of General Engineering, National Institute of Technology, Sendai College, Dr.Eng.

が (Fig. 2)、加賀藩の御蔵には、長庇と戸前庇があった^{注5)}。前者は、御蔵の間口全体に渡って掛かり、戸口と戸口を結んだ。また、複数で連係し御蔵所の門付近と敷地奥を結ぶ人や物の主動線を形成したのである^{注6)}。後者は、戸口のみに掛かる。それらの戸前型は、開放系 (開放型・半開放型) と閉鎖型があった^{注7)}。前者は後述する各地の御蔵の建築遺構によく見られ、後者は戸前空間を計屋などとして用いる御蔵に見られる^{注5), 12)}。

筆者の過去の研究において御蔵に長庇が確認された藩や幕府領は、加賀藩の他に弘前藩⁶⁾、大聖寺藩⁵⁾ (加賀藩支藩)、福井藩⁹⁾、鳥取藩⁷⁾、小倉藩³⁾、熊本藩⁴⁾、飛騨国高山町代官所¹³⁾や生野銀山生野代官所¹²⁾の各管内である。弘前藩では、戸口のみに掛かる戸前庇が標準であった^{注8)}。

2. 既往研究・研究の手順

御蔵所に関する建築遺構や既往研究については、文献2)で述べた。文献14)において筆者は、加賀藩御蔵所における長庇の空間形成に関して、鳥取藩御蔵所を参照しつつ、次の3つの空間構成原理を明らかにした。第一に、長庇が門の背後の庭と敷地奥を結んでおり、人や物の主動線を形成していること。第二に、敷地形状が正方形で門が間口の中央あたりに開かれる場合、上記の長庇のつながりは見られないこと。第三に、門が1ヶ所の平行A型や平行C型では、前記の長庇によるつながりが形成され難いことである^{注9)}。また、筆者の過去の研究において、用途を有する閉鎖型の戸前空間が確認されたので^{注10)}。戸前空間の用途が長庇による空間形成にも影響したことが予想される。但し、これらの戸前型式と庇形式 (長庇・戸前庇) との関連性は見られない⁵⁾。本稿では、弘前藩を除く前述の諸藩や幕府の御蔵所を対象とし、加賀藩に見られた3つの空間構成原理や庇の用途の観点から、近世期の日本の御蔵所における長庇による空間形成の効果について検討したい。

まず、領域毎に、戸前型式、建物配置の型式毎に見る長庇の発生率^{注11)}、長庇による門及び計屋とのつながり、戸前空間の利用の実態を示す。次に、加賀藩に見られた3つの空間構成原理や庇の用途から長庇の成立条件を明らかにする。庇の用途は、年貢米の搬入時の出来方 (米の計量、廻し俵の品質検査、俵装)、廻米等の搬出時の渡り方 (検査、手続き、一時保管) が考えられる。廻し俵は、籤引で抽出された米俵である。そして、開放系の戸前空間に注目し、門や計屋の位置関係の観点から長庇の連なりの平面形状を類型化 (回廊系・一方向廊下系) し、長庇による空間形成の条件及び機能について検討する。終わりに、近世期の日本の御蔵所における長庇による空間形成の効果及び地域性についての考察を試みることにする。なお、御蔵所には変遷があるので完成形と見られる藩政後期^{注12)}の御蔵所を対象とする。以後御蔵所は、固有名詞に山括弧を付けて記す。

3. 長庇による空間構成及び戸前空間利用の実態

3.1 大聖寺藩

建築遺構はなく、〈永町〉と〈荒町〉の建物配置が知られた。〈永町〉の「ひさし玄関」^{注13)}と記される戸前空間には、御蔵の戸口と同数の戸口が開かれており (Fig. 3)、閉鎖型と考えられた^{注14)}。建物配置の型式は、〈永町〉は基本型でない囲い込み系非連結A型¹⁾、〈荒

Fig. 3 A comparative figure of the "Naga-hisashi" in the Okura-syo owned by Daisyoji Domain and Fukui Domain

町〉は平行C型と見た^{注15)}。長庇の玄関は、〈永町〉の「東建」蔵を除く全ての御蔵にあった。従って、御蔵所における長庇の発生率は、平行型の方が高い。〈永町〉には街道へ向かって開かれた表門、船着き場へ向かって開かれた裏門があるが、玄関の長庇には、表門と裏門を結ぶ渡り廊下としての機能はない。〈荒町〉においても同じと思われる^{注16)}。計屋はどちらにもない。これらの御蔵所の庇の玄関は、

役人による廻米等の渡り方に用いられていた^{注17)}。一方、出来方は、蔵々で分割された庭が用いられたと推測される。廻し俵の検査は玄関でも可能と思われるが、このことを示す史料は見当たらない。

3.2 福井藩

建築遺構はなく、〈明里〉と〈松岡〉の建物配置が知られた。〈明里〉の戸前空間は知られない。藩政後期の〈松岡〉に関する絵図(Fig. 3)には、東端の御蔵の正面に開放型の長庇が描かれている。他の2棟は御蔵の背面が描かれていると見られ^{注18)}、長庇の発生率を明らかにすることはできない。建物配置の型式は平行B型と見られる。門は1ヶ所であり、長庇が門付近と敷地奥を結んでいる。計屋は福井藩御蔵所に見られない。〈松岡〉で徴収された年貢米は、〈明里〉へ運ばれた^{注19)}。出来方及び渡り方は、蔵々で分割された庭で行える。以上であるので庇の用途は特定できない。

3.3 鳥取藩

〈橋津〉に関する3棟の御蔵の建築遺構がある。天保14年(1843)の棟札がある「古御蔵」は、正面に「尾垂」と呼ばれる開放型の長庇が掛かる^{注20)}(Fig. 2)。尾垂は、鳥取藩領に特有の呼称であり、各地の御蔵所に関する史料に散見される。〈御来屋〉に関する文化5年(1808)の鳥取藩政資料「御来屋御蔵絵図」^{注21)}に描かれる各御蔵も開放型の長庇であり、鳥取藩の庇は開放型が基本と見てよいだろう。〈赤崎〉を除く全ての御蔵所において長庇が占めた(Table1)。

門は、通常2ヶ所であり、表門は搬入、裏門は搬出に用いられた^{注22)}。計屋は、年貢米徴収及び廻米に用いられた13ヶ所の御蔵所のうち12ヶ所に見られる。本来の検査所としての用途の他に、廻米搬出時の中継施設でもあった^{注23)}。特殊な環境条件の敷地を除いて、物資運搬などのため御蔵群の中ほどに配置されたと考えられた^{注24)}。その建築構成は、戸口が複数の壁面に開かれていたり(Fig. 4)、壁がなかったりした^{注25)}。長庇による2ヶ所の門と計屋とのつながりを型式毎に見る。

〈淀江〉、〈倉吉新〉、〈倉吉内〉は平行A型である^{注26)}。〈青屋〉は表門から見ると平行B型になる。いずれも表門が開かれる敷地辺の対辺に裏門が開かれている。計屋がある御蔵所では、両門を結ぶ長庇の連なりが見られ、これらの間に計屋が位置している^{注27)}。一方、計屋がない〈倉吉内〉の場合、裏門は町屋敷へ向かって開かれており、搬出に用いられたとは考え難い。従って、表門は搬出にも用いられたと考えられるので、本稿では門を1ヶ所として検討する。全ての御蔵にある長庇は、門が開かれる庭を囲んでいる。

〈浜〉、〈赤崎〉や〈米子西〉は囲い込み型である^{注28)}(Fig. 4)。加賀藩の囲い込み型では、敷地形状が正方形で門が間口の中央に開かれる場合、長庇が形成され難いことを前述した。これらの御蔵所は上記の条件に該当しない。〈浜〉では、米入門と米出門を結ぶ長庇の連なりが見られる。計屋は中庭にある。〈赤崎〉も同様である。しかし、極端に長細い敷地形状により計屋が敷地の端に配置された^{注29)}。〈米子西〉も囲い込み型であるが、門が1ヶ所であり、大凡〈倉吉内〉と同じ長庇の配置である。計屋は中庭にある。

基本型でない囲い込み系¹⁾の〈橋津〉^{注30)}や〈御来屋〉^{注31)}でも、表門と裏門を結ぶ長庇の連なりが見られる。これらの間に計屋が位置している。計屋が表門に近接する〈由良〉、〈大塚〉や〈米子東〉^{注32)}では、計屋と裏門を結ぶ長庇の連なりが見られる。一方、〈岩本〉では、両門を結ぶ長庇の連なりは見られない。なお、これも特殊な

Fig. 4 A comparative figure of the “Naga-hisashi” in the Okura-syo owned by Tottori Domain and Kokura Domain

環境条件によって計屋が敷地端に寄せて配置された事例である^{注33)}。

戸前空間も計屋と同様、渡り方において回漕業者へ引き渡された廻米用の米俵の一時保管場所として利用された^{注34)}。一方、年貢米の出来方は計屋を中心に行われたが、これに関連して計屋の周りの庭も用いられたと考えられる。

3.4 小倉藩

建築遺構はなく、〈大橋〉に関する見取図^{注35)}に長庇が描かれる。その戸前型式は明らかでない。長庇は、役所を除く全ての蔵や計屋

に見られる。小倉藩御蔵所の標準型は囲い込み型であり³⁾、長底の発生率が高い。門は、表門と裏門があり、裏門は津出し門であった。

〈八屋〉にもこれらの門が見られる (Fig. 4)。計屋は、「廻し蔵」と記され、廻し俵の検査に用いられた^{注 36)}。これらの御蔵所において「廻し蔵」は表門の脇に位置している (Fig. 4)。〈大橋〉では、長底が計屋から中出蔵^{注 37)}、御蔵を経て裏門まで連なっている。一方、〈八屋〉の戸前空間は知られないが、役所以外の建物に長底を想定すると、上記と同様である。計屋での廻し俵の検査以外の年貢米の出来方は、中庭を用いていたことが知られた^{注 38)}。敷地内には役人の居所である役所もあり、戸前空間の特定の用途は考えられない。

3.5 熊本藩

幕末期に建てられた〈川尻外城〉の2棟^{注 39)}、〈宇土〉の1棟^{注 40)}の建築遺構がある。まず、これらの御蔵について見ておく。御蔵所全体を復元することはできなかった⁴⁾。戸前空間は、3棟とも開放系の長底と考えられる^{注 41)} (Fig. 5 写真)。長底は、熊本藩では「垂」と呼ばれた。〈川尻外城〉の2棟は、棟が平行関係でなく、共有庭がない点が平行型と異なる (Fig. 5)。〈宇土〉は御蔵が1棟のみと見られ、どちらも型式化は難しい。門は、〈川尻外城〉の場合、川へ向かって開かれていた^{注 42)}。〈宇土〉の門は知られないが、米俵が船で積み出されていたので、川側にあったと考えられる。計屋の存在は知られない。どの御蔵も妻面を川へ向けているので、長底は敷地の川側とその反対の奥を結んでいる。

次に、肥後国の〈高瀬〉、〈川尻東〉、〈川尻中〉、〈八代永〉、豊後国の〈鶴崎〉は、見取図や復元図から御蔵所の建物配置及び御蔵の戸前空間が知られる。〈川尻中〉^{注 43)}以外の御蔵所に長底が見られる。

〈八代永〉は開放型で母屋の屋根を延長している^{注 44)}。〈鶴崎〉も開放型と推測される^{注 45)}。〈高瀬〉、〈川尻東〉の戸前型式は不明である。

〈川尻東〉は平行A型、〈鶴崎〉は囲い込み型、〈高瀬〉は平行系非対面型¹⁾、その他は型式化しなかった。平行A型の〈川尻東〉の場合、3棟の御蔵から成り、門から見て正面の御蔵にのみ長底がある (Fig. 5)。囲い込み型の〈鶴崎〉の場合、全ての御蔵に長底がある。藩政後期の改築前^{注 46)}の〈高瀬〉では、5棟の御蔵のうち3棟に長底が見られる (Fig. 5)。長底は、いずれも川側へ妻面を向けており、うち主たる2棟の御蔵は背中合わせに配置されている^{注 47)}。型式化しない八代城内に位置した〈八代永〉では、L字形に配置された2棟の御蔵それぞれに長底が見られる。門は、〈高瀬〉では表門と裏門の2ヶ所であり、津出しには裏門が用いられた^{注 48)}。他の御蔵所は1ヶ所である。計屋は、藩政後期の改築前の〈高瀬〉と〈八代永〉に見られる。〈高瀬〉に「御米廻場」とあり、廻し俵の検査が行われた。「御米廻場」は会所の一部であり、検査には役人が深く関わったと推測される。

〈高瀬〉において両門を結ぶ長底の連なりは見られない。計屋は、御米山床^{注 49)}の出入りに位置し、御米山床を意識した配置になっている。門が1ヶ所の〈八代永〉において長底は、門辺りから敷地奥へ向かって連なっている。その計屋は長底で囲まれている。〈川尻東〉、〈鶴崎〉も門が1ヶ所であった。〈川尻東〉の場合、門から敷地奥へ至る長底の連なりは見られない。一方、〈鶴崎〉の場合、門から敷地奥へ至る長底の連なりが顕著である。

長底の戸前空間は、出来方時の急な降雨時に米俵の一時置き場として利用されていた^{注 50)}。つまり、出来方は、計屋のある御蔵所に

Fig. 5 A comparative figure of the "Naga-hisashi" in the Okura-syo owned by Kumamoto Domain

おける廻し俵の検査を除いて、蔵々で分割された庭で行われていたと考えられる。一方、渡り方時には、庭に御米山床を設けて船での積出しに備えたので^{注51)}、上記以外の特定の用途は考え難い。

3.6 高山町代官所管内

〈高山町〉の御蔵の大半^{注52)}、〈古川町〉の御蔵の4番室の一部^{注53)}が現存する。〈高山町〉の建築遺構は、坊と呼ばれる室が8坊あり、これらが南北方向2列、東西方向に4坊並んだ一棟である。藩政時代は、さらにその東側に室が4坊あり、これらに1つの切妻屋根を掛けた建築であった。両平側に戸口があり、母屋の屋根を伸ばして開放型の長庇を形成しているが(Fig.6 〈高山町〉②)、両妻側に下屋を設けることで回廊になっている。このような開放型の回廊は、〈古川町〉にも見られる(Fig.6)。但し、下屋形式である。どちらも御蔵は一棟であり、建物配置の型式化は難しい。搬入搬出に用いる門は、1ヶ所であり、御蔵所敷地の隅部付近に開かれている。回廊は門に近接しており、門付近と敷地奥とを結んでいる。計屋は、見られない。戸前空間の用途は、米俵の一時保管や年貢米の検査と推測した^{注54)}。しかし、全ての戸口を結ぶ回廊としての機能を考えると、出来方や渡り方は、主に蔵前の庭が用いられたと考えられよう。なお、廻米は行われず、収納米は、給米になったり領内で売り払われたりした。

3.7 生野代官所管内

建築遺構はなく、絵図史料(Fig.7)から代官所内の〈口〉や〈奥〉^{注55)}の御蔵の戸前空間が知られる。両者とも、戸前空間は閉鎖型であり、壁で囲まれた室になっている。戸前の室は、全ての御蔵に見られる。各御蔵所に御蔵が2棟ある。〈口〉では、代官所の主屋を挟んで配置されており、型式化していない(Fig.7)。一方、〈奥〉では、敷地囲いの中であって向かい合っており、平行A型をなしている。門は、両者とも1ヶ所である。〈口〉の門は、代官所の正門である。各御蔵は敷地奥にあつて門から窺えない。〈奥〉の御蔵は門に近接するが、その長庇は室内化された計屋であり、その妻側の一方に役人の詰所がつくので^{注56)}、長庇に門と敷地奥とを結ぶ機能はない。

年貢米の出来方は、戸前空間及び蔵前の庭が用いられたと考えられる。廻米は行われず、収納米は御手当米として銀山町の住人へ支給された^{注57)}。この渡り方にも役人が詰所において関わったと推察される。

4. 長庇による空間形成の条件及び機能の検討

4.1 長庇の成立条件

加賀藩に見られた長庇に関する3つの空間構成原理及び庇の用途の観点から検討する。

4.1.1 原理1：長庇は、門の背後の庭と敷地奥とを結んでおり、人や物の主動線を形成している

加賀藩の場合、御蔵所の門は通常1ヶ所であった。計屋は、当初なかったが、藩政後期頃に村々の組合によって設置された^{注58)}。各御蔵所における長庇の発生率は、東国寄りの越中国や能登国で低く、西国寄りの加賀国で高かった^{注59)}。

大聖寺藩や生野代官所管内において長庇は、個々の御蔵の玄関や付属の計屋であつて開放されておらず、動線を形成していない。門が1ヶ所の御蔵所で、長庇が門の背後の庭と敷地奥とを結んでいたのは、鳥取藩の囲い込み型の〈米子西〉や平行A型の〈倉吉内〉、福井

Fig.6 A comparative figure of the "Naga-hisashi" in the Okura-syo owned by shogunate in Hida Province

藩の平行C型の〈松岡〉、熊本藩の〈八代永〉や囲い込み型の〈鶴崎〉、高山町代官所管内の〈高山町〉や〈古川町〉である。上記の連なりが見られないのは、熊本藩の平行A型の〈川尻東〉である。門が2

ヶ所の御蔵所で、長庇が門の背後の庭と敷地奥を結んでいたのは、鳥取藩の前記以外の御蔵所、囲い込み型の小倉藩の〈大橋〉である。上記の連なりが見られないのは、熊本藩の藩政後期改築前の〈高瀬〉である。但し、全ての長庇が計屋より裏門側（川側）に位置し、妻面を川へ向けていた。〈高瀬〉に上記の連なりが見られない理由は、個々の御蔵や御米山床と川とのつながりを重視した熊本藩独自の空間形成手法^{注60)}にあると考えられる。なお、平行A型の〈川尻東〉に上記の連なりが見られない理由は4.1.3節で述べる。

さらに、長庇による2ヶ所の門（表門・裏門）と計屋とのつながりについて検討する。計屋が表門と裏門を結ぶ線の比較的近くに位置した場合、両門を結ぶ長庇の連なりが、1) 線の両側なのは平行型の〈淀江〉、〈倉吉新〉、〈青屋〉、囲い込み型の〈浜〉、囲い込み系¹⁾の〈橋津〉である。2) 線の片側のみなのは、囲い込み型の〈赤崎〉や小倉藩の〈大橋〉、囲い込み系¹⁾の〈御来屋〉である。なお、〈御来屋〉は、計屋が前記の線からやや離れており、特殊な事例に位置付けられる。3) 計屋が表門に近接し、計屋から裏門へ至る長庇の連なりが見られたのは、囲い込み系同種連結型¹⁾の〈由良〉、囲い込み系¹⁾の〈大塚〉や〈米子東〉である。一方、計屋が前記の線から離れて位置し、両門を結ぶ長庇の連なりが見られなかったのは、囲い込み系¹⁾の〈岩本〉、や熊本藩の藩政後期改築前の〈高瀬〉である。以上、門が2ヶ所になり、表門が搬入、裏門が搬出というふうに機能分化され、計屋が両門を結ぶ線の近くに設けられると、両門を結ぶ長庇の連なりが形成された。

4.1.2 原理2：敷地形状が正方形で門が間口の中央あたりに開かれる場合、原理1の長庇の連なりが見られない

標記は、加賀藩では囲い込み型等の御蔵所に見られた。敷地形状が正方形に近く、表門が敷地間口の中央に開かれる大聖寺藩の〈永町〉も長庇によるつながりは見られない。しかし、この御蔵所は基本型でなく、各御蔵の戸前空間は玄関であった。他に敷地形状が正方形の御蔵所はないので、整った方形の御蔵所において検討を試みる。囲い込み型の熊本藩の〈鶴崎〉や型式化しない高山町代官所管内の〈古川町〉では、門から敷地奥へ至る長庇の連なりが見られた。しかし、これらは、門が敷地間口の中央あたりに開かれてない。また、長庇の発生率が100%の御蔵所であり（Table1）、長庇の発生率が比較的低い加賀藩^{注61)}とは前提条件がやや異なる。以上、標記の規則性は加賀藩に顕著な性質と言えるだろう。

4.1.3 原理3：（門が1ヶ所の）平行A型や平行C型は、原理1の長庇の連なりが形成され難い

加賀藩の平行型では長庇の発生率は低かった^{注62)}。また、長庇の発生率が高い鳥取藩では、文献14)において平行A型でも長庇による主動線が見られることを述べた^{注63)}。他藩はどうだろうか。熊本藩の平行A型の〈川尻東〉や大聖寺藩の平行C型の〈荒町〉に、長庇の連なりは見られない。前者も長庇の発生率が低く、後者の長庇は玄関であり、渡り廊下として機能しない。以上、該当事例が少ないが、標記は長庇の発生率の低い平行型の御蔵所に顕著な性質と言えよう。

4.1.4 庇の用途

Table2は、各地の年貢米の出来方と廻米等の渡り方を一覧にしたものである。特定の用途は、閉鎖型の戸前空間で認められるが、開放型の戸前空間では認められない傾向が見て取れる。後者の場合、

Fig.7 A comparative figure of the “Naga-hisashi” in the Okura-syo owned by shogunate in Ikuno Silver Mine

Fig.8 A diagram of a corridor system that long eaves enclosed the yard

独立棟の計屋があり、計屋や庭が御蔵所の業務の中心となっていた。なお、加賀藩では、当初出来方を御蔵内で行っていた記録があり^{注64)}、このことが困難になったため、村々が仮設の計屋を設け、次第に常設の計屋へと変化していった経緯がある。

以上、戸前空間は、通常特定の用途がない限り開放型であったと考えられる。

4.2 長庇による空間形成の条件・機能

開放型の戸前空間を有する御蔵所を取り上げ、長庇の連なりの平面形状や門及び計屋との位置関係の観点からを類型化し、それらの比較から御蔵所の長庇による空間形成の条件について検討する。まず、長庇を平面形状から見ると、ロの字やコの字形に長庇が連なり、庭を取り囲むもの（以後、「回廊系」と）、囲まないもの（以後、「一方向廊下系」）に分けることができる。

4.2.1 回廊系

第一に、鳥取藩に、門が2ヶ所で回廊が計屋の両側に通る事例が見られる。その1つ目は、回廊が表門と裏門を結ぶ線に沿った事例（Fig.8のI-1）であり、囲い込み型の〈浜〉、平行型の〈淀江〉、基本型でない囲い込み系の〈橋津〉があげられる。2つ目は、計屋が表門に近接したため、回廊が裏門の開かれぬ敷地奥にも通る事例（同I-2）であり、基本型でない囲い込み系の〈由良〉、〈大塚〉や〈米子東〉があげられる。3つ目は、回廊が表門と裏門を結ぶ線に沿わない事例（同I-3）であり、基本型でない囲い込み系の〈御来屋〉があげられる。第二に、門が2ヶ所で回廊が計屋の片側に通る事例（同II）が見られる。囲い込み型の鳥取藩の〈赤崎〉や小倉藩の〈大橋〉があげられる。これらは、計屋が敷地の端に寄せて配置されており、計屋の4つの立面のうち、1面のみに戸口が開くものである。第三に、門が1ヶ所で回廊がある事例が見られる。その1つ目は、長庇が内庭を形成する事例（同III-1）であり、囲い込み型の鳥取藩〈米子西〉や熊本藩の豊後国における〈鶴崎〉、平行型の鳥取藩の〈倉吉内〉があげられる。2つ目は、御蔵の周囲に長庇が巡る事例（同III-2）であり、型式化しない高山町代官所管内の〈高山町〉や〈古川町〉があげられる（以上、14ヶ所）。

以上、回廊系では各地の囲い込み型の御蔵所や鳥取藩の基本型でない囲い込み系の御蔵所が占める（10ヶ所）。門が2ヶ所の場合、長庇が計屋を囲っていたが、計屋の位置によって囲い方が異なった（I-1～3, II）。一方、門が1ヶ所の場合、特殊な事例を除くと、長庇によって内庭が形成される傾向があった（III-1）。

4.2.2 一方向廊下系

長庇が囲いを形成しない事例（Table1のIV）は次の通りである。門が2ヶ所の御蔵所では、平行型の鳥取藩の〈倉吉新〉や〈青屋〉、基本型でない鳥取藩の囲い込み系の〈岩本〉や熊本藩の平行系非対面型の〈高瀬〉があげられる。門が1ヶ所の御蔵所では、平行型の福井藩（松岡）、型式化しない熊本藩（八代永）があげられる（以上6ヶ所）。御蔵所の全体の様子が知られない建築遺構についても検討を試みる。〈宇土〉に関する旧御蔵は1棟であり、1棟では囲いは形成できない^{注65)}。また、〈川尻外城〉に関する2棟も背中合わせに配置されていることを前述した。これらのみでは、囲いは形成できない^{注66)}。

以上、一方向廊下系は、比較的数が少なく、平行系の建物配置の事例が占める（4ヶ所）。なお、肥後国の河港における熊本藩御蔵所は、前述した固有の空間形成手法により、共有空間を必要としなかった。

4.2.3 小まとめ

開放型の長庇においては、回廊系の事例が大半を占める。門が2ヶ所の場合、両門を結ぶ回廊を形成し、門が1ヶ所の場合、門から一周する回廊を形成した。また、年貢米の出来方及び渡り方の中心である庭と御蔵との間に用途のない中間領域を形成し、人や物の流通に寄与している。一方、一方向廊下系は数が少なく、上記した長庇による2ヶ所の門のつながりも顕著でない。

5. まとめ

本研究は、藩政後期の日本の御蔵所における長庇による空間形成について以下のことを明らかにした。

Table1 A list of Okura-syo*¹ that had “Naga-hisashi” , according to the number of gates and the corridor system

Name of domain	Name of Okura-syo	Type of building arrangement	Incidence of the long eaves (%)	Inspection station	two gates	The corridor system by naga-hisashi*2
Tottori	Hama	Enclosure	100	○	○	I-1
Tottori	Yodoe	Parallel	100	○	○	I-1
Tottori	Hashizu		100	○	○	I-1
Tottori	Yura		100	○	○	I-2
Tottori	Otsuka		100	○	○	I-2
Tottori	Yonago-higashi		100	○	○	I-2
Tottori	Mikuriya		100*3	○	○	I-3
Tottori	Akasaki	Enclosure	80	○	○	II
Kokura	Ohashi	Enclosure	100	○	○	II
Kokura	Hachiya	Enclosure	-	○	○	(II)
Tottori	Yonago-nishi	Enclosure	100*4	○		III-1
Tottori	Kurayoshi-uchi	Parallel	100			III-1
Kumamoto	Tsurusaki	Enclosure	100			III-1
Takayama	Takayama-machi		100			III-2
Takayama	Furukawa-machi		100			III-2
Fukui	Matsuoka	Parallel	-			IV
Tottori	Kurayoshi-shin	Parallel	100*5	○	○	IV
Tottori	Aoya	Parallel	100	○	○	IV
Tottori	Iwamoto		100	○	○	IV
Kumamoto	Yatsushiro-naga		100	○		IV
Kumamoto	Takase		60	○	○	IV
Kumamoto	Kawashiri-tojo		100			IV
Kumamoto	Uto		100			IV
Daiyoji	Naga-machi		83		○	-
Daiyoji	Ara-machi	Parallel	100		*6	-
Ikuno	Oku	Parallel	100	○		-
Ikuno	Kuchi		100	○		-
Kumamoto	Kawashiri-higashi	Parallel	33			-

Note)

*1: Targeted Okura-syo except the Kaga domain

*2: Refer to the Fig.8, IV: a one-way corridor system that long eaves didn't enclose the yard, () is a guess

*3: Exclude from count the Okura which has possibility that was added

*4: Exclude tool shed from count

*5: Exclude from count the storehouses that stocked the fare and the rice of stockpile

*6: Okura-syo that the back side of site opened to the river port

Table2 A list of Deki-kata and Watari-kata in Okura-syo that owned by domain and Shogunate

Name of domain, Shogunate's territory	戸前型式 Type of Tomae	出来方 Deki-kata		渡り方 Watari-kata	
		Tomae	Others	Tomae	Others
Kaga : case1	閉 Enclosure	—		○	
〃 : case2	閉 Enclosure	○	庭	—	
〃 : case3	開 Open	×	庭・計屋	—	
Daiyoji	閉 Enclosure	×	庭	○	
Fukui	開 Open	×	庭	—	
Tottori domain	〃	×	庭・計屋	一時保管	
Kokura	〃	×	庭・計屋	—	
Kumamoto	〃	×	庭・計屋*1	×	山床
Takayama	〃	×	庭	—	
Ikuno	閉 Enclosure	○	庭	○ (詰所)	

Note)

*Case1: Hon-okura that stores the Kaimai which locates near the sea

*Case2: Inland okura-syo in which Tomae is an inspection station

*Case3: Nakadashi-okura which relays transportation of the land tax

*出来方: Making an annual land tax of rice, *庭: Yard,

*計屋: Inspection station, *1: A few Okura-syo

*渡り方: Passing rice bag of straw, *一時保管: Temporary storage,

*山床: Place where many rice bag of straw has been piled up

*詰所: Room of inspector,

まず、長庇の成立条件を、加賀藩御蔵所に見られた空間構成原理や庇の用途の観点から、長庇を有する他藩や幕府の御蔵所について検討した。第一に、長庇が門の背後の庭と敷地奥を結び人や物の主動線を形成している点は、開放型の戸前空間を有する領域の多くの御蔵所に見られた。さらに、門が2ヶ所の御蔵所で、表門が搬入、裏門が搬出というふうに機能分化され、計屋が両門を結ぶ線の近くに設けられた場合、長庇は両門を結んで連なったことが知られた。

一方、上記の事柄は、閉鎖型の戸前空間を有する御蔵所や、独自の空間形成手法が顕著な熊本藩の一部の御蔵所には見られなかった。第二に、敷地形状が正方形で門が間口の中央あたりに開かれる場合や平行A型や平行C型において、門の背後の庭と敷地奥を結ぶ長底の連なりが見られない傾向は、長底の発生率の低さが原因であり、このような御蔵所に顕著な性質と考えられた。第三に、戸前空間は、閉鎖型の場合検査などの用途があり、開放型の場合特定の用途がないことが考えられた。

次に、開放型の戸前空間を有する御蔵所について、長底の連なりの平面形状の観点から、長底による空間形成の条件及び機能を検討した。長底の連なりがロの字やコの字形に庭を取り囲む回廊系と、囲まない一方向廊下系に分けることができた。大半を占める回廊系の御蔵所では、門が2ヶ所の場合、両門を結んで庭を囲む回廊を形成し、門が1ヶ所の場合、門から一周し、中庭を囲む回廊を形成した。また、開放型の長底は、年貢米の出来方及び渡り方の中心である庭と御蔵との間に用途の特定しない中間領域を形成しており、人や物の流通に寄与したと考えられた。

以上、西日本の御蔵所に顕著な長底は、計屋としての用途を獲得したり（閉鎖型）、回廊を形成したりして（開放型）、御蔵所をより機能的にしたと結論付けられる。本稿は、これまでの筆者による日本の御蔵所研究のまとめの一つである。都合3編を通して見ると、東日本では建物配置の基本型を保持しつつ計屋を機能的に進化させた。一方、西日本では建物配置の基本型にとらわれず、長底や門を多用してより生産性の高い建物配置の御蔵所を実現したと言えよう。

謝辞

本稿は、10年の長きに渡る実地調査及び史料調査の成果である。各地において史料を閲覧させていただいた機関や個人の方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Okura-syo in Japan During the Edo Period (Part 2), Cause that the Okura-syo Got the Regional Characteristics and Formed the Type of Building Arrangement, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 86, No. 787, pp. 2326-2336, 2021. 9(in Japanese)
- 2) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Okura-syo in Japan During the Edo Period (Part 1), Influence on Building Arrangement of Okura-syo by an Inspection Station, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 86, No. 781, pp. 1063-1072, 2021. 3(in Japanese)
- 3) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Go-Okura-syo Owned by the Kokura Domain in the Late Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 85, No. 774, pp. 1779-1788, 2020. 8 (in Japanese)
- 4) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Kumamoto Domain in the Edo Period (Vol. 1) -The Characteristics of Spatial Structures of Okura-syo and the Formation Factors-, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 84, No. 759, pp. 1209-1219, 2019. 5 (in Japanese)
- 5) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Daisyoji Domain Located in the Kaga Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 83, No. 752, pp. 1989-1997, 2018. 10 (in Japanese)
- 6) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Hirosaki Domain in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 83, No. 746, pp. 755-762, 2018. 4 (in Japanese)
- 7) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Tottori Domain in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 81, No. 724, pp. 1373-1383, 2016. 6 (in Japanese)
- 8) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Kaga Domain Located in the Kaga Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 79, No. 705, pp. 2517-2526, 2014. 11 (in Japanese)
- 9) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Located in the Kuzuryu River Basin in the Edo Period -By Comparison Between the Fukui Domain and the Katsuyama Domain-, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 78, No. 687, pp. 1143-1150, 2013. 5 (in Japanese)
- 10) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Kaga Domain Located in the Noto Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 77, No. 682, pp. 2865-2872, 2012. 12 (in Japanese)
- 11) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Domain Located in the Ettyu Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 77, No. 676, pp. 1471-1478, 2012. 6 (in Japanese)
- 12) Sagami, C.: Study on Okura at the Magistrate's Office of the Feudal Government Established in Ikuno-Ginzan Town in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 81, No. 729, pp. 2487-2495, 2016. 11 (in Japanese)
- 13) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Feudal Government Located in the Hida Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 78, No. 687, pp. 1135-1141, 2013. 5 (in Japanese)
- 14) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Okura-syo Owned by Kaga Domain in the Edo Period -About the Spatial Formation by "Naga-hisashi" (Long Eaves that Cover Around the Entrance)-, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 83, No. 743, pp. 93-101, 2018. 1 (in Japanese)
- 15) Edited by Editorial Board of "History of Kaga City": Kagashishi-tsushihen (History of Kaga City), Vol. 1, Kaga City Hall, 1978
加賀市史編纂委員会編：加賀市史通史編上巻，加賀市役所，1978
- 16) Edited by Tottori Pref.: Tottorikenshi (History of Tottori pref.), Vol. 12, Tottori Pref., 1979
鳥取県編：鳥取県史12，鳥取県，1979
- 17) Edited by Editorial Board of "History of Hawaii Town": Shinsyu-hawaityoshi (History of Hawaii Town (New Version)), Hawaii Town, 1994
羽合町史編さん委員会編：新修羽合町史，羽合町，1994
- 18) Edited by Kawashiri Town Hall: Higo-kawashirityoshi (History of Kawashiri Town in the Higo Province), Kawashiri Town Hall, 1935
川尻町役場編：肥後川尻町史，川尻町役場，1935
- 19) Edited by Tsurusaki Town: Bungo-tsurusakityoshi (History of Tsurusaki Town in the Bungo Province), Vol.1, Tsurusaki Town Hall, 1937
鶴崎町編：豊後鶴崎町史上巻，鶴崎町役場，1937
- 20) Edited by Editorial Board of "History of Kumamoto City (New Version)": Shin-kumamotoshishi-shiryohen (History of Kumamoto City (New version), Source Book), Vol.5, Kumamoto City, 1998
新熊本市史編纂委員会編：新熊本市史史料編第5巻，熊本市，1998
- 21) Edited by Makino, R.: Kagashi-shiryō (Historical Materials of Kaga City), Vol. 5, Kaga City Library, 1985
牧野隆信編：加賀市史料第5巻，加賀市立図書館，1985
- 22) Edited by Editorial Board of "History of Uto City": Shin-utoshishi-shiryohen (History of Uto City (New Version), Source Book), Vol. 2, Uto City, 2002

宇土市史編纂委員会編：新宇土市史資料編第2巻、宇土市、2002
23) Edited by Board of Education of Oita City: Oitashi-no-bunkazai
(The Cultural Property of Oita City), No. 19, Board of Education of
Oita City, 1982
大分市教育委員会編：大分市の文化財第19集、大分市教育委員会、1982
24) Edited by Class of Reading Ancient Documents in Ikuno:
Yomikudashi-ginzankata-moshiokuri (Changing the “Ginzankata-
moshiokuri” to Sentence of Modern Japanese), Class of Reading
Ancient Documents in Ikuno, 2016
生野古文書教室編：読み下し銀山方申送、生野古文書教室、2016

注

- 注1) 文献11), p. 1472 本稿において筆者は、平行型を半数以上の御蔵が庭を挟んで平行関係に配置されるものとした。さらに、文献10), p. 2866において加賀藩の平行型を、門が敷地の中心へ向かって開かれ、広い庭を有する平行A型、門が敷地の隅に設けられ門から各御蔵へは敷地の端を通る平行B型、門が敷地の中心へ向かって開かれるが、A型のような広い庭を有しない平行C型、平行A型と平行B型の併合型である平行AB型に細分類した。
- 注2) 文献11), p. 1472 本稿において筆者は、囲い込み型を収納以外の蔵も含めて4棟が庭を囲む(建物で方形の中庭が形成される)ものとした。
- 注3) 文献1), p. 2326
- 注4) 文献1), pp. 2329-2330
- 注5) 加賀藩では、長庇を「長戸前」、戸前庇を「切戸前」と呼んだ。長戸前は御蔵の間口全体に渡って連続する、切戸前は戸口毎に分れる戸前空間である。
- 注6) 文献14), p. 98
- 注7) 開放型は下屋の平側・妻側とも壁がなく、半開放型は妻側にのみ壁がある。
- 注8) 文献6), p. 758 長庇は、敷地奥の大蔵の一部に設けられることがあった。
- 注9) 文献14), pp. 95-96 本稿において筆者は、平行A型の場合、門付近において2つの動線に分かれてしまい、主動線を設定しに難い。平行C型の場合、御蔵が複数列に配置されるので、主動線がない旨を述べた。
- 注10) 文献5), p. 1992 大聖寺藩の御蔵の閉鎖型の長庇は、「玄関」と呼ばれ、廻米や米の払出し時、米俵の受け渡し場として用いられた。
- 文献12), p. 2489 生野代官所所管の御蔵の閉鎖型の長庇は、「斗場」と呼ばれ、年貢米徴収時の検査や、米の払出し時の受け渡しが行われる計屋であった。
- 注11) 本稿では、長庇もしくは長戸前を有する御蔵の棟数を、御蔵の全棟数で除した百分率とする。
- 注12) 藩政時代(江戸幕府成立(1603)から明治維新前まで(1867))を均等に三期に分けた場合の後期(1780-1867)。本稿の検討に用いた見取図等は、殆ど全てが藩政後期の作製である(図版出典参照)。鳥取藩の青屋御蔵所と熊本藩の川尻東・中御蔵所については、御蔵所の年代を推定することができなかった。
- 注13) 「永町御蔵ノ図」、個人蔵(文献15), p. 727 掲載)
- 注14) 文献5), p. 1992
- 注15) 文献5), p. 1992
- 注16) 「荒町」についても見取図(Fig. 3 図版出典)に「玄関」と記されるが、戸口は描かれていない。しかし、玄関の梁行長さや後述する用途は、(永町)の玄関と変わらない。なお、裏門は見られないが、敷地奥は船着き場であり、こも出入口と考えられる。
- 注17) 文献5), p. 1992 「荒町」の場合、払い下げられた古杵の摺り立ても行われた。
- 注18) 御蔵にはいくつかの室があり、1室に1ヶ所の戸口が開く。正面側に複数の戸口が連続して開くことになるので、背面側に戸口はない。通常御蔵は、物資を搬入・搬出しやすいように正面を門側へ向けて配置される。以上のことから、門側でない面が窺える他の2棟の御蔵は、背面を描いたものと考えられる。
- 注19) 文献9), p. 1144
- 注20) 「三拾間」蔵や「片山」蔵の一部も現存する。減築前の前者に関する明治末期の古写真(個人蔵)も開放型である。一方、同じく後者に関する昭和38年(1963)刊行の『羽合町勢要覧』掲載の古写真では半開放型であるが、尾垂の両妻壁が後補である可能性は否定できない。
- 注21) 鳥取県立博物館蔵、文献7), p. 1375 掲載
- 注22) 文献1), p. 2328

- 注23) 弘化4年(1847)2月27日の「在方諸事控」(文献16), pp. 327~328 所収)に、「御来屋御蔵此度之御廻米千百貳拾五俵、去ル七日御廻米下作廻前田源三郎立会御手船寛肇丸賄政右衛門え相渡し、計り屋尾垂等え為差置、(後略)」とある。
- 注24) 文献7), p. 1379
- 注25) 鳥取藩政資料「米子御城門正面之御絵図」、弘化4年(1847)、鳥取県立博物館蔵 本図の〈米子西〉及び〈米子東〉の計屋
- 注26) 筆者は、文献14), p. 97において〈淀江〉、〈倉吉新〉、〈青屋〉を平行A型と見た。また、文献1), p. 2327において上記に加えて〈倉吉内〉も平行型とした。その理由として、〈倉吉内〉の場合、番屋を含めると囲い込み型と見ることができなくもないが、番屋は通常小さな小屋であり、門に関係して配置されるので、御蔵及び計屋による空間構成に及ぼす影響は殆どないことをあげた。
- 注27) 〈青屋〉の場合、裏門が2ヶ所あり、計屋の位置はやや変則的である(Fig. 4)。
- 注28) 文献2), pp. 1064-1065 における類型化による。
- 注29) 文献7), p. 1379
- 注30) 文献17), pp. 258-259 本書に、「宝永」蔵は宝永期(1704-1710)に、「駒帰」蔵は元禄12年(1699)の因幡国における駒帰御蔵の廃止に関連して設置されたとする。これらを除いて見ると、表門と裏門を結ぶ長庇の連なりが明確になる(Fig. 4)。
- 注31) Fig. 4 において「増築の可能性」と記した蔵々は、嘉永7年(1854)の御来屋全景を描いた絵馬(住吉神社蔵、文献7), p. 1377 掲載)に見られる。本図は、御来屋全景を描いたものであり、御蔵所の建物の配置は正確であるが、その姿を正しく描いたものとは言い難い。
- 注32) 文献7), p. 1377 本稿において筆者は、計屋が接するFig. 4のc門は年貢米の搬入、a門はこれに隣接する重臣(城主)の米蔵への出入りに、b門は隣接する建物の役人に用いられたと考察した。これらのうち、廻米として米俵を搬出する場合、計屋が接するc門のみでは混雑するので、各門が裏門としての機能を果たしていたことが推測される。
- 注33) 文献7), p. 1379 〈岩本〉の計屋も当初は表門付近にあり、蔵々で取り囲まれていた。日比屋川開削後、計屋はこの川沿いに移され、蔵々で取り囲まれた。その後、日比屋川沿いに蔵々が増築されて、Fig. 4 になった。
- 注34) 前掲注23)
- 注35) 図版出典Fig. 4 参照。
- 注36) 文献3), p. 1781。
- 注37) 中出蔵は、手永と呼ばれる村々の組合が設けた年貢納入の中継施設。
- 注38) 文献3), p. 1784
- 注39) 所在地は、熊本市南区川尻3丁目3。藩政期の川尻町には、御茶屋を中心とした惣囲いの内に〈川尻東〉と〈川尻中〉、外に〈川城外城〉の3ヶ所の御蔵所があった。
- 注40) 所在地は、宇土市馬之瀬町私有地内。
- 注41) 〈川尻外城〉に関する旧東蔵の戸前空間は半開放型、旧西蔵のそれは開放型として復元された。旧東蔵は、両妻側の各1室が失われているため(文献4), p. 1213)、従前の妻壁を継承して整備された。従前の妻壁は後補であり、藩政時代の様子は不明である。現状の旧宇土御蔵の戸前空間は、外壁や間仕切りによって部屋になっている部分も見られるが、これらは比較的新しい材料であり、戸前空間を部屋として利用するため、後に付け足されたものと見られる。
- 注42) 「天保3年(1832)川尻町絵図」の写し、文献18)所収(文献4), p. 1211 掲載)
- 注43) Fig. 5 の〈川尻中〉の御蔵は1棟のみであり、敷地の大半は御米山床(後掲注49)として用いられていたと思われる。文化8年(1811)の「官職制度考」には、3ヶ所合わせて9棟の御蔵が記されているので、本図は、御蔵の数が少ない時代の御蔵所を描いたものと考えられる。
- 注44) Fig. 5 及び松井文庫「八代城図」(八代市立博物館寄託)による。
- 注45) 「夢の跡ばなし」(文献19), pp. 448-449 掲載)によれば、幕末期の御蔵所には5棟の蔵(「在蔵」、「大蔵」、「大蔵(二十間)」、その他蔵2棟)があった。「大蔵(二十間)」は「四間梁に桁二十間。西に九尺庇付」、「大蔵」は「梁六間桁行九間、前に九尺の庇付壁なし」、その他の蔵は「三間半九間前に一間庇付二棟」である。主たる「大蔵」のみに「庇付壁なし」とあるが、この他の御蔵の戸前空間が閉鎖型とは考え難い。
- 注46) 〈高瀬〉を描いたFig. 5の作製年代は、安永8年(1779)から天保12年(1841)までの間である(図版出典参照)。嘉永7年(1854)の「玉名郡高瀬町の絵図」(熊本県立図書館蔵)において初見の御米山床が天保12年(1841)に設置されているので、これに併行して御蔵所も改まったと考え

られる。

注 47) 改築後の〈高瀬〉に関する嘉永 7 年 (1854) の「玉名郡高瀬町の絵図」(熊本県立図書館蔵) には、2 棟の御蔵の平面がだまかに描かれている。戸前空間は知られないが、平側は対面しておらず、どちらも妻側を川へ向ける点は変わらない。

注 48) 表門は幹線道路へ向かって、裏門は船着き場へ向かって開かれている。安政 2 年 (1855) の「菊池川全図」(熊本県立図書館蔵) には、船着き場と御蔵所を結ぶ荷揚げ場や俵ころがしが描かれている。俵ころがしは、米俵を船で積み出す時に使用した。

注 49) 熊本藩は、徴収した米俵を屋外に山積みした。これに苦による防雨処置を施し、囲いを設けて保管した。御米山床と呼ばれる。御米山床にも御蔵が設けられることがあった。

注 50) 〈川尻外城〉東蔵に関する弘化 3 年 (1846) の永青文庫「覚帳」(文獻 20), pp. 799-804 所収) に、「(前略) 場内山床共至而狭く、御蔵々々梁行細ク、戸前之大垂とても差而無之候間、俄雨之節等者在中より持出候御米囲所無之、濡俵出来いたし、(中略) 六間梁ニ三拾間之御蔵一棟、新規御建方可被仰付哉と、(後略)」とあり、「大垂」(梁行の長い長庇) の戸前が急な降雨時に米俵の一時置き場として用いられることが推測できる。

注 51) 玉名市ホームページ→歴史博物館ころろピア→常設展示→廻船と高瀬御蔵の時代 <https://www.city.tamana.lg.jp/q/aview/457/995.html> (2021 年 5 月閲覧)

注 52) 所在地は、高山市八軒町 1-5 「高山陣屋」内

注 53) 所在地は、飛騨市古川町金森町私有地内

注 54) 文獻 13), p. 1139

注 55) 〈口〉(代官所) は生野 7 町の但馬街道側に、〈奥〉は谷川に沿った奥銀屋町付近に位置した。

注 56) Fig. 7 の絵図史料に、「斗場」とある。斗場の桁行長さは各御蔵のそれと同じであり、梁行長さは全て 2 間である。詰所は、桁行長さ 2 間、梁行長さ 1 間である。

注 57) 文獻 12), p. 2487

注 58) 文獻 2), p. 1067

注 59) 文獻 14), p. 94 本稿において長戸前と切戸前の優勢具合を各々にある戸口の数で比較した。長戸前が優勢な御蔵所は、能登国では 16 事例中 4 事例 (25%)、越中国では 16 事例中 6 事例 (38%)、加賀国では 5 事例中 4 事例 (80%) である。

注 60) 文獻 4), p. 1216

注 61) 囲い込み型を比較すると、長庇 100% の御蔵所は、加賀藩 7 事例中 1 事例 (14%, 文獻 14), p. 94) に対して、本稿が対象としている御蔵所 5 事例中 4 事例 (80%, Table1) である。なお、戸前空間が不明な〈八屋〉は対象から除外した。

注 62) 平行型を比較すると、長庇 100% の御蔵所は、加賀藩 23 事例中 2 事例 (9%, 文獻 14), p. 94) に対して、本稿が対象としている御蔵所 7 事例中 6 事例 (86%, Table1) である。なお、加賀藩 2 事例には、戸前空間が不明な御蔵があり、これを除外して 100% とした。後者の母数から、大半の御蔵の戸前空間が不明な〈松岡〉を除外した。なお、長庇の発生率が低い場合、長庇による門の背後の庭と敷地奥とのつながりが形成され難い理由を前掲注 9) で述べた。

注 63) 文獻 14), p. 97

注 64) 嘉永 3 年 (1850) の高島家文書「御蔵方」(高岡市立中央図書館蔵) に、「福野御蔵御米出来場所先年ハ御蔵之内ニ而出来仕候得共近來初納相重り御米御蔵之内ニ而出来兼申ニ付去年迄ハ御蔵戸前ニ附添小屋相懸梁間四間行間拾八間ニ而三囲ニ仕居候所右小屋懸賃并取毀賃外ニ雪落シ等人足料年々相重り御蔵下迷惑仕候ニ付此末何卒年々相用壁付之斗小屋梁間四間ニ行間拾二間外ニ七尺ニ拾二間通落屋附添相建申度」とある。

注 65) 文獻 4), p. 1214 本稿において筆者は、御蔵と刎出との位置関係から、御蔵の東隣りの土地は御米山床であったと推定した。

注 66) 〈川尻外城〉の御蔵の棟数は知られない。現在の地図に敷地の推定範囲を示してみると、西蔵の奥に空き地がある (Fig. 5)。ここに御蔵があったとしても、御蔵同士が向かい合うことはなく、共有空間は形成されない。

図版出典

Fig. 1, 2, 8 筆者作製、Fig. 2 写真 筆者撮影

Fig. 3 〈永町〉「永町蔵所下絵図」(加筆済み), 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵 作製年は文獻 5), p. 1991 において享和 2 年 (1802) 以後と推定した。原図の写真に、解説文字、記号、方位を記入した。なお、() の文字は、説明のため筆者が加筆したものである (Fig. 5 〈川尻東・中〉, 〈高瀬〉, Fig. 6

〈高山町〉①も同じ)。

〈荒町〉文獻 21), pp. 408-409 掲載の「荒町救荒御蔵絵図」の複製を基に、縮尺を 1 間を 1mm として筆者が作製した。「荒町救荒御蔵絵図」原図の所在は不明。作製年は、文獻 5), p. 1996 において嘉永 7 年 (1854) 以降と推定した。

〈松岡〉「天保十一庚子歳改極印町田畑絵図」, 天保 11 年 (1840), 個人蔵 原図の写真に、記号、方位を記入した。

各御蔵所に共通する要素について、記号、凡例を統一した (Fig. 4-6 も同じ)。

Fig. 4 鳥取藩: 文獻 7), p. 1376, p. 1378 より転載。敷地周辺や屋根の仕様は省略し、縮尺を 1 間を 0.5mm に変更した。さらに、両門を結ぶ線を加筆した。原図の名称、作製年もしくは御蔵所の推定年代、所蔵先については以下の通り。

〈浜〉鳥取藩政資料「浜村御蔵絵図」, 藩政後期, 鳥取県立博物館蔵、

〈赤崎〉鳥取藩政資料「赤崎御蔵絵図」, 藩政後期, 鳥取県立博物館蔵

〈米子西〉・〈米子東〉「米子御城絵図」, 明和 2 年 (1765), 鳥取県立博物館蔵

「米子御城内惣絵図」, 元治 2 年 (1865), 米子市立山陰歴史館蔵 これらの絵図に描かれる両御蔵所の内容は殆ど変わらない。

〈淀江〉鳥取藩政資料「淀江御蔵絵図」, 文化 5 年 (1808), 鳥取県立博物館蔵

〈倉吉新〉鳥取藩政資料「倉吉新御蔵絵図」, 藩政後期, 鳥取県立博物館蔵

〈青屋〉鳥取藩政資料「青屋御蔵絵図」, 鳥取県立博物館蔵

〈倉吉内〉鳥取藩政資料「倉吉御蔵図」, 藩政後期, 鳥取県立博物館蔵

〈由良〉鳥取藩政資料「由良御蔵絵図」, 幕末期, 鳥取県立博物館蔵

〈大塚〉鳥取藩政資料「大塚御蔵絵図」, 幕末期, 鳥取県立博物館蔵

〈岩本〉鳥取藩政資料「岩本御蔵絵図」, 藩政後期, 鳥取県立博物館蔵

〈御来屋〉鳥取藩政資料「御来屋御蔵絵図」, 文化 5 年 (1808), 鳥取県立博物館蔵

〈橋津〉鳥取藩政資料「橋津御蔵絵図」, 文化 5 年 (1808), 鳥取県立博物館蔵

小倉藩: 文獻 2), p. 1065 より転載。両門を結ぶ線を加筆した。原図の名称、作製年もしくは御蔵所の推定年代、所蔵先については以下の通り。

〈大橋〉: 福岡県指定有形文化財小笠原文庫「大橋村御茶屋・御蔵所・牢屋・高札場・境石・皆見村一里塚図」, 文政 5 年 (1822) 以後, 福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵 (みやこ町歴史民俗博物館寄託) 本図の建物配置や文字で表示されている長さを用いて作製したもの。

〈八屋〉辛島文書「上毛郡八屋御茶屋・御蔵・牢屋・宿々御高札・御境石・老里塚画面」, 幕末期, 求菩提資料館蔵

Fig. 5 〈宇土〉左図、宇土市教育委員会提供測量図 (2005 年) に、現存する旧御蔵及び長庇を表示した。右図、現況北側立面図 (文獻 22), p. 433 より転載)

〈川尻外城〉左図、東蔵現況長庇内写真, 熊本市提供。右図、熊本市都市政策課所有の地図データに、現存する旧御蔵及び長庇、旧御蔵所の推定範囲を示した。上記地図データは、熊本市長の承認 (平成 30 年 (2018) 11 月 9 日、承認番号 30-9 号) を得て使用した。

〈川尻東・中〉「河尻御茶屋絵図」(永青文庫蔵, 熊本大学附属図書館寄託) 御蔵所部分の建物、敷地囲い、門や堀をトレースして作製した。本図の作製年等は不明。トレースに解説文字、記号、東蔵範囲を記入した。

〈鶴崎〉①「維新前鶴崎町全景図」, 個人蔵。 本図は、文獻 19) 口絵に掲載されている原図を、昭和 6 年 (1931) に矢野又彦が模写した写し図である。なお、原図の所在は不明。本図の写真に、解説文字を記入した。

②文獻 4), p. 1213 より転載。各建物の大きさ及び位置は、安政元年 (1854) の再建後、幕末期の御蔵所の様子を伝える、所在不明の文獻「夢の跡ばなし」(文獻 19), pp. 448-449 掲載) や「鶴崎小路絵図」(文獻 23), 口絵掲載 (原図の所在不明), 寛政 11 年 (1799) から文化 11 年 (1814) までの間の作製) による。

〈高瀬〉「高瀬御茶屋絵図」(永青文庫蔵, 熊本大学附属図書館寄託) 御蔵所部分の建物、敷地囲いや門をトレースして作製した。本図の作製年は不明であるが、文獻 4), p. 1212 において、安永 8 年 (1779) に設けられた会所が見られ、文化 8 年 (1811) の記録にある桁行 33 間の新蔵や天保 12 年 (1841) に新設された川岸に接する御米山床が見られないことから、この間の御蔵所を描いたものと推定した。トレースに解説文字、記号、御蔵所範囲を記入した。

〈八代永〉左図、松井文庫「二階櫓眺望図」, 八代市立博物館寄託。同館は作製年代を 1800 年頃としている。右図、「八代城間取図」(八代市立博物館蔵) に描かれる建物の柱割りを基に 1 間を 1mm として筆者が作製した。原

図の作製年は不明であるが、御蔵所の建物配置は、幕末期の松井文庫「八代城図」（八代市立博物館寄託）と変わらない。

Fig. 6 〈高山町〉①、高山陣屋文書「飛州高山陣屋絵図」，岐阜県歴史資料館蔵
作製年は記されていないが、本図に「田口様御支配之節僉絵図」と記されていることから、この代官が当地を支配した文化元年（1804）から同 8 年（1811）までの間の陣屋を描いたものである。原図の写真のトレースに、

解読文字（御蔵所部分のみ）、記号を記入した。

②、筆者が実測して作製した。高山陣屋管理事務所協力。

〈古川町〉①、筆者作製。1 間を 2mm として描いた。各房や庇の長さは、「古川御米蔵他葺替一件」（岐阜県歴史資料館蔵）に収められる見取図のうち、「古川町村御蔵絵図」による。本図の御蔵の建築構成や規模は、文化 3 年（1806）の高山陣屋文書「飛州吉城郡古川町方村御米蔵屋根并庇葺替御修覆出来形帳」（岐阜県歴史資料館蔵）と変わらない。江戸時代の絵図に描かれる敷地囲いの門や柵、用水池を描いた。天保 12 年（1841）、敷地内の御蔵の西隣りに、郡代の「百石五粒法」の施行による備荒貯蓄のための囲糶蔵が 1 棟建てられている。「古川収納組廿五ヶ村抱御囲穀蔵僉絵図」（飛騨市教育委員会蔵）に描かれる囲糶蔵の外形を描いた。

②、「古川御収納御米更御囲糶蔵老棟絵図面」，飛騨市教育委員会蔵 作製年は記されていないが、本図と一連の作と見られる『古川収納組廿五ヶ村抱御囲穀蔵僉絵図』（飛騨市教育委員会蔵）があり、御蔵の一部の房が囲糶蔵として使用されたのは飯塚郡代による寛政 3 年（1791）の「急難手当蓄積法」の施行以後であることから、藩政後期の作と考えられた。

Fig. 7 「生野銀山町陣屋（代官所）・口番所・米蔵・山神社絵図」，個人蔵

（文献 24），口絵掲載） 作製年は不明であるが、本図に描かれる建物の数や大きさが藩政後期の史料と一致することから、本図から藩政後期の建築構成を見ても大過ないと考えられた。原図の写真に、解読文字、記号、大まかな方位を記入した。なお、「奥御蔵」の方位は、現在の跡地の川や道路との位置関係から検討した。

本研究は、科研費（18K04551）の助成を受けたものである。

STUDY ON SPATIAL STRUCTURES OF OKURA-SYO IN JAPAN DURING THE EDO PERIOD (PART 3) : ABOUT THE SPATIAL FORMATION BY “NAGA-HISASHI” (LONG EAVES THAT COVER AROUND THE ENTRANCE)

Chikao SAGAMI^{*1}

^{*1} Prof., Dept. of General Engineering, National Institute of Technology, Sendai College, Dr.Eng.

Chapter 1: This study aims to clarify the effect of the spatial formation of naga-hisashi, long eaves covering Okura's entrances in Japanese Okura-syo in the Edo period. And the regional characteristics in Japan are shown. The space under Okura's lean-to roof has two kinds of eaves: naga-hisashi and tome-hisashi, with separate eaves on each door. Naga-hisashi connects multiple doors in front of the Okura. The author's previous research has revealed that the naga-hisashi of the Kaga Domain Okura-syo, beyond their original function of eaves, formed the main flow of the Okura-syo.

Chapter 2: Previous researches and the procedure of this study are presented.

Chapter 3: This chapter focuses the Okura-syo in domains and Shogunate territory which had naga-hisashi. And discusses their usage, tomae type, incidence of the long eaves that divided those into types of building arrangement, and their connection with gates and inspection stations for each territory.

Chapter 4: The conditions for the construction of naga-hisashi are examined

First, the naga-hisashi connect the garden behind the gates with the back of the Okura-syo site to form the main flow for people and goods, as seen in many Okura-syo in the territory with an open-type tomae. Further, if there were two gates—front gates to carry in and back gates to carry out goods—and the inspection stations were near the line connecting the two gates, the naga-hisashi were lined up to connect the gates. However, this was not observed with enclosure-type tomae spaces or in some of the Okura-syo of the Kumamoto Domain, known for their unique spatial formation.

Second, if the sites were square-shaped and the gates opened in the center of wide of the sites, or in parallel A type or parallel C type Okura-syo, the lack of naga-hisashi connecting the garden behind the gates and the back of the Okura-syo site was considered to be a remarkable characteristic of Okura-syo with a low incidence of naga-hisashi.

Third, the enclosure-type tomae space was used for inspection and other purposes but the open type did not have purposes of use.

Next, the conditions for the spatial formation with naga-hisashi and the function of the naga-hisashi, in Okura-syo with open-type tomae were examined from the viewpoint of the plane form of naga-hisashi which lined up. This plane form could be divided into two types: a corridor system in which the naga-hisashi surround the garden from three or all four sides or a one-way corridor system that does not surround the garden. Most Okura-syo had the corridors system: In case of two gates, those formed a corridor enclosing the garden and connecting to two gates. And in case of single gates, those formed a corridor around the garden, circling from the gates. Additionally, the open-type naga-hisashi contributed to the flow of people and goods by forming an unused area between the garden, the center for making the annual land tax payment and passing rice bags of straw, and the Okura.

Chapter 5: This chapter concludes that the naga-hisashi was not limited to the eaves' original functions but made the Okura-syo more functional by getting an inspection station (enclosure type) or forming a corridor (open type). And the different regional characteristics on between the eastern Japan and the western Japan were shown.

(2021 年 5 月 7 日原稿受理, 2021 年 10 月 13 日採用決定)